■講演

「今に生きる過去の景観－地図にみる長久手の歴史－」

講演者：山村　亜希（愛知県立大学日本文化学部准教授）

ただいまご紹介にあずかりました山村亜希です。ここ長久手町にあります愛知県立大学に勤務しています。先ほどちょっとおっしゃっていただきましたが、私の専門は歴史と地理です。今日はこの後、「未来フォーラム」ということで、長久手町が市制に向けて、これからの未来に向けてどのような方向が望ましいのかということを探っていくフォーラムですが、そのちょうど画期（かっき）となるこの時期に、今一度、長久手の過去、これまでの足元を見直すよい機会かなと思っています。そういった点で私に白羽の矢が立って、ここでお話しすることにさせていただけたのだと思います。

今日は、長久手の歴史と地理というお話をしたいのですが、そのときに、１つ切り口を今日は設定させていただきたいと思います。それは「風景・景観」です。風景・景観というものは非常に身近なもので、今、皆さんの目に映る、まさにこの身の回りにあるものです。それはもちろん現代の風景なのですが、その中には、長久手がこれまで培ってきた歴史であったり、それからもともと持っている地理であったり、そういったものが深く刻み込まれています。今日はそのあたりの話をこの場でさせていただきたいと思っています。

１点だけお断りをしておきたいのですが、私の専門は、決して歴史学そのものではありませんので、長久手合戦にしましても、長久手の歴史にしましても、私よりももっと詳しい研究者の方もみえますし、研究書もあります。

歴史そのものというよりは、歴史が投影された風景をどのように読み解いていくかという視点でお話しさせていただくことをご了承ください。

今日のお話は、主に３つです。最初に今の長久手のお話をさせていただいた後、１つのテーマである明治の長久手のお話をさせていただきたいと思います。それが２点目。

そして明治の長久手の風景、そういった昔の風景が、今どのように生きているのかというお話を３点目にさせてもらいます。

そして４点目に、1584 年、戦国末期に起こった歴史上とても有名な長久手の戦い、これを今の長久手の風景の上に置き換えて理解すると、どのように見えてくるのかという視点で長久手の合戦のことを少しお話しさせていただきたいと思います。この３点です。

それではまず初めに、長久手の今の経過について簡単にお話しさせていただきます。ここにいらっしゃる皆さんは、おそらく長久手町の町民の方が大多数かと思いますので、今からいろいろお見せする地図も写真も、たぶん見慣れた、どこかで見たことがあるような写真が多いかと思います。

この前に今出していますのが、平成の長久手の地図です。見てお分かりのように、一番左端に、名古屋市ですが、藤が丘の駅があり、そしてモリコロパークが右端にある、この間が長久手町です。そして黄色のラインがグリーンロード、あの大きな道路になります。

長久手の風景・景観を少し大まかに見たところ、大体２つのパターンがあると思います。１つがこちら側、西側、それから南側に広がる風景です。このあたりは、今現在こちらにあります文化の家もそうですが、新しい新興住宅地が広がっています。例えばこれは長久手古戦場駅のあたりから見た写真ですが、こういった新しい家々がびっしり並んでいく、きれいに整えられた区画の中に並んでいく、新興住宅地の風景です。それが西側と南側の風景。

これに対しまして東側の風景というのは、若干おもむきを異ならせています。ここにはまだ多くの農地、田んぼや畑が残されています。そして起伏の多い長久手の丘、この丘陵も多く残されています。もちろん、このあたりにもたくさんの住民の方が住んでいらして、家もありますが、その中には旧集落、明治の頃からある集落も、分かる形でよく残されています。

これが公園西、駅から撮った写真ですが、まさにこういった景観です。

このように今の長久手の風景は大きく見ると、大体古戦場公園のあたりで２つのパターンを見ることができます。西側南部は新興住宅地、そして東側には田園と丘陵と旧集落が残っている、こういう風景です。

それでは、こういった２つの風景が今隣り合ってバランスよくあるわけですが、これがいつからこうなったのかという話に少し戻りたいと思います。

先ほど町長さんのお話にもありましたが、1972 年から長久手町では段階的に土地区画整理事業が行われてきました。この、前に示してある地図の色が塗ってある西、南の部分、これが区画整理事業によって形が整えられた、現在では新興住宅地になっているゾーンです。このあたりはもちろん藤が丘の駅にも隣接していますし、名古屋市からのアクセスがとてもいいということで、本来は農地であったり丘陵であったところが多いのですが、これが区画整理がなされて住宅地に変わり、そういったところに新しい住民の方もいらして、流入人口が増加したエリアになります。

この白紙で白く残されている部分が、この土地区画整理事業がまだ行われていない部分です。土地区画整理事業が行われている、ちょうどはざかいのあたりが長久手古戦場駅のあたりですが、このあたりで西に向いて撮った写真がこの２枚の写真です。上の写真のように、ひな壇のように土地が区画されて、そこに新しい住宅が建っている、こういった景観です。

これに対して西側は、先ほど申し上げたように、まだ実施されていません。このあたりは市街化調整区域と申しまして、もともとある農地を保護する、そして市街化を一旦抑制する、そういった目的の下に、まだ市街化が調整されているエリアです。

と申しましても、明治や江戸時代の風景がそのまま残っているわけではなく、そこにある農地も大型の機械が入りやすいように、田んぼの形はずいぶんきれいに整えられています。これが圃場（ほじょう）整備という事業です。ですので、農地は残っているのですが、その形は旧来どおりではなく、きれいな田んぼの形に変わっているところが多いです。

先ほどの区画整理が行われたところを後ろに振り向いて撮った写真がこちらです。ちょうど市街化区域と市街化調整との間で撮ると、上のほうの写真のように、振り向くと後ろのほうに、いくつか集落が見えていますが、前面は大きな水田、農地が広がっています。こういった景観が残っているということです。

このように２つの景観がバランスよく残っているというのが、今の長久手の景観の特徴だといえます。

今までお話ししてきたように、こういった２つのパターンの景観をつくっていった大きな理由は、名古屋市に隣接するというまち、この長久手のまちの人口の増加です。特に前回の2005年の国勢調査から今回の2010年の国勢調査の間の人口の伸び率は非常に高くて、愛知県内で一番の人口増加率であったことは新聞等でご存じの方も多いかと思います。

こういった多くの町民の方がいらして、それを支えていったのが、それより先行して行われていった70年代からの土地区画整理事業。そしてそれとはまた別に、そうでない市街化を抑制するために行われていった市街化調整区域。こういった２つの規制というか、政策になります。

いわば70年代以降ですが、近年、現代の歴史というものが、まさに今、私たちの目の前の風景を作り上げていったということがいえると思います。

それでは今の風景というのは、この70年代以降、急速に発展していって以降の歴史だけが作り上げてきたものなのでしょうか。私はそうではないと思っています。

というのは、長久手には、もちろん人々が住み始める前から自然環境があり、もともと持っている自然環境の上にずっと人間が住み続けてきた長い過去の歴史があります。それに比べると、ここ30年、40年というのは、ほんのわずかな歴史です。そういった長い長い歴史の積み重ね、その前にある自然環境、これに加えて近年の歴史、これが全て融合して変化を起こして現代の風景を作り上げてきた、このように考えています。

ここで言う「歴史」というのは、今言った観点からすると、人々の長い日常生活とか社会の積み重ねのことを言っています。どうしても「歴史」というと、いろいろな、目が当たりやすい、画期的な出来事に目が行きがちです。この長久手においては長久手の合戦という、これはこれでとても歴史的な意義のある大きな出来事なのですが、その事象ばかりがフィーチャーされるというか、取り上げられる傾向にあるのですが、決して長久手の合戦が起こったから、今の長久手の風景ができたわけではなくて、それ以前からある、その後もある人々の歴史が、今の風景を作る原型になってきた、このように考えています。

こういう幅広い観点から歴史を捉え、それがもともとの自然環境と融合し、そして現代においても変化をし続けている、こういったもののことを単純に「風景」と言わないで、最近は「景観」とよく言われています。

いろいろなところで、テレビ等で世界遺産とかも最近よく取り上げられていますが、一つ一つの史跡ではなくて、それらが全て存在している舞台と言いますか、そういったものを併せて「景観」とよく言っています。ここで私が取り上げている「景観」というものも

同じ意味です。

こういった景観というものを見ていくことは、何が面白いかといいますと、自然環境というものは、どこでも同じ自然環境ではありません。長久手には長久手特有の地形があって、長久手特有の水の出方、水の得方があって、土壌があって、こういう、その土地その土地が持っている地理というものがあります。それに加えて歴史というのも、日本全国同じような歴史があるわけではなくて、地域地域で異なる歴史があります。

ですので、当然景観というものは、その土地その土地で違ってきます。その土地特有の地形の上に、その土地特有の歴史が積み重なって、化学変化を起こして出来上がってくるものが今の景観です。

ですので、今の景観というものをよくよく見てみると、そこにはオリジナルな長久手の個性であるとか地域性が見えるのではないかと考えています。

最初に私の専門のことをあまり申し上げなかったのですが、このような、景観から歴史を読んでいくということが、今私が取り組んでいる歴史地理学という研究です。

それでは本題の1点目ですが、120年前の長久手というお話をさせていただきたいと思います。今目の前のスクリーンに出ていますのは、明治24年（1891年）の地形の地図です。このような地図になっています。ちょっと遠くて地名等は読めないかと思いますが、ぱっと全体をご覧いただきたいと思います。

一面の山です。山というか低い丘陵です。今、青でラインをなぞっていますが、これがこの丘陵地帯の中を流れている一番大きな川の香流川です。現在でも役場のあたりの岩作（やざこ）にここから向かう途中にある川が香流川です。

この香流川が長久手町域では最大の河川でした。ただ、この香流川、上流を見ていただきますと、ずっと青い線が右のほうに延びていますが、ちょうどもうこの地図が切れたあたりで香流川の上流はなくなります。つまり香流川という川は、ずっと向こうの、つまり上流がとても深いわけではなく、非常に浅いと言いますか、上流が非常に限られています。ですので、この川に集まってくる水というのも、それほど大量の水が流れ込むような河川ではありません。もちろん一時的な増水時には非常に水位が上がりますが、日常的にはそれほど広い集水域を持っている河川ではない。それはおそらく庄内川とか濃尾平野の川などを想定していただくとすぐ分かると思います。

こういった香流川のあたりに開けた町、エリアが、この長久手だということです。

これは1カ月前ほどに撮った写真ですが、香流川は今でも、見ていただきますと非常に河床が低いんですね。堤防などは高くつくってありますが、もともとの川が流れているレベルというものがとても低い川です。日常的にはこういった水量がとても多くはない、そういった川になります。

当然、この東から西へ流れる香流川に、さらに合流する小さな河川もいくつもあります。ただ、それらをトータルしても集水域は狭く水量は少ない、こういった土地柄です。

ここで今、ちょっと色を塗ってみました。黄緑色で色を塗ったところが明治24年段階の

水田です。水田というのは、必ず農作業の工程で水を入れますので、水を得やすいように低い低地部につくられることが一般的です。ですので、水田を塗ったところは、まず他よりも低い低地部であるとみなして差し支えません。

逆に申しますと、塗り残した、今白くなっている部分がちょっと小高い丘の部分になります。こうするとよく平地の形が分かります。香流川に沿って大きな平地があることもよく分かると思います。

この水田の形なのですが、全体的にぱっと捉えていただきますと、一面わっと広く広がっているわけではなくて、ぐにゃぐにゃと非常に複雑に細長く入り組んでいる様子がよく分かると思います。

例えば、今丸で示しましたこの部分は、ちょうど西北から南東にかけて、ずっと細長い田んぼのエリアが続いています。この部分だけ低くて、両側は高いという地形です。こういう地形のことを簡単に言いますと「谷」です。

この愛知県のあたりでは、谷地形を指す独特の地名方言ではないですが、地名の言葉があります。その１つが「湫（くて）」です。もう１つが「狭間（はざま・ばさま）」と呼ばれている地名です。この長い谷、まさに「長湫」なんですね。こういう長久手という地名は、こういった地形条件を端的に表現した地名であることがよく分かります。

この谷ですが、今、赤で示しているところだけが谷なのではなくて、たくさんあります。例えばこれは南に行くと、今の日進市の岩崎、竹の山のほうに行きますが、ここもずっと細長い谷がつらなっています。これも谷です。そして香流川の上流も、ここもずっと細長いエリアで、これも大きな谷です。

こういった大型な谷だけではなくて、こういった中規模の谷、そしてこんな小さな谷、挙げていったら赤で埋まってしまうので、もう書きませんが、こういった無数の谷が丘陵を削っていって入り組んでいるというのが、これがもともとの長久手の地理、地形です。

そして先ほど申し上げました「湫」「狭間」、これが狭い長い谷、こういったことを指す地名です。

それとは逆に、当然谷があれば丘が残ります。丘も谷に刻まれて細長くなったり、一部分だけぽこっと高くなったりします。そういった丘や尾根の地形、そういった地形のことをこのあたりでは「根」と言います。中根とか丸根とか、いろいろな根地名が残っていると思いますが、これも長久手の特徴です。まとめて言えば、「湫」と「根」が錯綜（さくそう）するような地形が本来の長久手の地理かと思います。

さて、それではこういったところに、人々はどんな集落をつくっていたのか。これを見ていきたいと思います。同じ地図ですが、明治 24 年の頃、人々はどこに住んでいたのか。この地図で若干黒くなっているところが人々が住んでいる集落の部分です。例えばこのあたり、大きな黒がまとまっているゾーンがありますが、これは２つの大きな集落です。名前が、上の集落が、今の役場がある岩作、そして現在の、今いる場所にとても近い、はなみずき通駅の近くが長久手という集落です。現在では全域を長久手と総称していますが、

前近代までは一つ一つ異なる名前が付いた集落でした。ですから、いろいろな集落の集合体が現在の長久手エリアです。

他にも集落はたくさんあります。今、赤で入れましたが、こういったところにも、まとまって黒いものが見えます。これも全部集落です。小さいところには丸をしていませんが、こういったところの地名は、こういったものが旧集落の地名になっています。

余談になってしまいますが、もうこれは長久手町ではなくて名古屋市のほうですが、一番左端に藤が森というものが見えます。これが、今の藤が丘の駅のあたりにあった旧集落の名前です。おそらく藤が丘の「藤」という地名は、この藤が森からきたものと考えられます。

もう一回、長久手のほうに話を移しますと、このように１カ所にまとまって大きな集落があるわけではなくて、大規模なものから小規模なものまで、いろいろなバリエーションの大きさの地図が集合しているというのが、この当時の人々の住み方です。特に大きいものが岩作と長久手です。

ここでちょっと先ほど見ていただいた地形とこの集落の立地の関係を見ていきたいと思います。今写真にあげているのは、公園西駅から撮った北熊集落です。北熊集落の位置は、この地図の右のほうです。この北熊集落ですが、地図を見ていただくと、集落のすぐ左側には一面の田んぼが広がっています。集落の裏手は丘になっています。つまり、この北熊集落は、ちょうど丘が平地に滑り込むふもとの部分ですね。ちょうど丘のふもとのちょっと高くなったところ、そこに出来上がった集落だということが分かります。

これは今の写真からでもよく分かります。今、真ん中のあたりに家がたくさんあります。この中には新しい家もありますが、旧来から住んでいらっしゃる古い家も多くあります。

この地形を見ていただきますと、左側は低い水田で、そして右に行けば行くほど、ちょっとずつ高くなって丘陵になっていきます。ちょうど丘陵と水田のはざかいというか、境目のちょっと小高くなったところ、そういったところに北熊集落が乗っかっているということがよく分かります。

写真を一回ちょっと下げます。こう見ていただきますと、ほとんどの集落は、ほぼ今申し上げた北熊集落と同じ立地をしていることが分かります。集落は谷を見下ろす丘のふもとにあります。そこは谷の中に住むよりも、とても有利なのです。谷の中は田んぼがありますが、そこは湿地で、川が流れていますので、大水が来たときには水害が避けられない。それを回避できるポイントで、でもかと言って山の上に上がりすぎると、今度は水を掘って飲料水を得ようとしたときに、そうとう深く掘削しないと地下水まで到達しません。

ですので、水が得られやすくて、なおかつ水害や湿地を回避できる、そのちょうど境目のところに人々が住んでいるということが、よく分かります。

ここは当然、農地にも近く、他よりも若干高いので、安定した微高地です。これが旧来の人々の住み方であったと考えます。

さて、次に今度は青で色を塗ったところをご覧ください。これは全て溜め池です。こう

見ていただきますと、今でも杁ケ池公園に杁ケ池という池がありますが、以前、明治段階では非常に多くの池が、この町域にあったということが分かります。全部カウントしたことはないのですが、おそらく優に 40～50 は超えるぐらいの、さまざまな大きさの池がありました。

それではこういった池は、なぜここにあるのか。池というのは、意味なくあるわけではありません。もちろんそれは、そこに水を溜めておいて、水田の耕作に使う用水池です。ということは、こういった池から水を引いてこられるエリアには、もう田んぼが出来上がっているということになります。

この無数の溜め池ですが、どこにあるのかというのを見ていただきますと、あまり平地のど真ん中には無いのですね。むしろ長湫であったり、そういう湫と呼ばれる細長い谷の奥のところに大小の池ができあがっています。つまり、谷の奥というのは、放っておいても周りの山から水が注ぎ込んできます。それをある一点でせき止めることで、比較的容易に溜め池の築造が可能です。つまり最小のコストで最大の成果を得ようと思うと、そういった土地を利用するということになります。

そういった谷の奥、奥をせき止めて出来上がった溜め池が、この無数の溜め池です。無数の溜め池というのは、つまり無数の谷が入組んでいるから、たくさんの溜め池ができる。これも長久手の地理を生かした溜め池の築造です。

こういったふうに溜め池がたくさんある理由はもう 1 点あります。それは、水が不足しているからということです。最初に見ていただきましたように、香流川は集水域がとても狭くて、本来、河床も非常に低く、十分な水量が得られません。それを補完するための水溜めとして多くの溜め池が築造されたと考えられます。

それぞれの溜め池の築造年代は、はっきりとは分からないのですが、資料などを見ていますと、大体近世の初期、江戸時代の初頭、17 世紀、18 世紀の頭ぐらいに掘られたと言われていますので、その時期がちょうど長久手の本当に開発ラッシュだったのかもしれません。

この中で、ちょっと規模が大きな池に注目してみたいと思います。例えばここ、南のほうの谷に大きな池があります。この池が今も公園として残る杁ケ池です。そして長久手の岩作の村のさらに北側にも大きな池があります。これが愛知医科大学の前に広がる立石池（たていしいけ）です。これらの池は他の池と比べると、非常に規模が大きい、そうとうの労力を投入して築造した池だと考えられます。

こういったものをつくっているということは、この下流域においては、水は比較的得やすいわけです。農耕に適したところにしたということだと思います。

ここで少し戻って、集落の中でも岩作と長湫が大きいということを地図から読めるということを言いました。ではなぜ岩作と長湫が大きいのかということを考えてみましょう。

今、岩作と長湫の位置を楕円で示してあります。確かに大きいです。ここに今、赤いラインで斜めに 1 本線が入れてあります。これが名古屋から瀬戸に抜ける、江戸時代の、こ

の地域の主要道です。こう見ていただきますと、往来が激しい道路に、長湫と岩作のまちが沿っているということが分かります。

他にもたくさんの道路はあるのですが、今も岩作の旧集落のあたりを行きますと、この写真を見ていただきますと、ちょっとたわんでいますが、これが名古屋から瀬戸に抜ける街道の残りです。今の道路は車に適して、出来る限り真っ直ぐ、真っ直ぐ走らせようとします。ですので、ちょっと無茶な坂でも真っ直ぐ越えてしまうのですが、江戸時代の道路というのは、ちょっとでも高まりがあったら避けようとして、くねくね、くねくね曲がるんですね。

江戸時代のこの街道は、若干、その木のあたりでカクッと曲がっているのが分かると思いますが、こういうのも、今でもよく残っています。

この主要道に沿って２つの大きな集落があるということが分かります。ちょっとご紹介しておきたいのが、それとはクロスするかたちで、西北の方向から東南の日進岩崎の方向に抜ける道路も昔からあったことが分かります。

これは道の名前がよく分からないので、「岩崎への道」と書きましたが、こういう道路もありました。ちょうどその２本の道路が交差するところが、現在の景行天皇社（けいこうてんのうしゃ）の前です。

岩崎へ抜ける道は、あまり残りが良くないのですが、長久手の古戦場の公園の裏手にこういう道があるのですが、これが岩崎に抜ける道の一部です。

こう考えてきますと、長湫と岩作という大きな集落は、江戸時代では街道が通っている、これがおそらくまちを発展させた大きな要因の１つだと思います。そして周りと比べると、谷の規模が大きいですね。集落の前に広がる水田の大きさがとても大きい。そしてその奥には、立石池や杁ケ池のような、大きな人造池、築造池がつくられています。

そういったこともあり、農耕をする上でも、そして人々の往来、交通機能が高いという上でも、特に大きな集落になったのではないかと思います。

このように考えてきますと、今言ったことをまとめたものがこの文章です。香流川が流れているけれども水量が少ない。これに注ぎ込むいろいろな川が複雑に大小の谷と丘をつくっている。それが長久手、「湫」や「根」のある地形をつくっています。

そして谷に接する丘のふもとには集落が点在し、谷の奥には香流川をおぎなう重要な水源として、数多くの溜め池がつくられていました。そしてこのあたりと通る街道沿いと、それに大きな谷や溜め池があるという地理条件が加わると、特に大きな長湫と岩作という集落に発展した、こういった状況が見て取れるかと思います。

これまで繰り返し話してきましたように、こういった 120 年前の長久手というのは、「長久手」という地名を生み出したような特有の自然地形にかなった景観をしています。その自然を利用しながら、時には克服し、共存しながら過去の人々が積み重ねた営みの中で出来上がってきたものです。この 120 年前の景観は、まさに自然と歴史がつくりだした景観と言えると思います。

それでは２点目のお話になります。今申し上げたような 120 年前、前近代、近代になるより前の古い原景観ですが、これは今生きているのだろうかということです。もちろんそれから 120 年経っているという歴史があります。その間に大きな変化を遂げました。これは長久手に限らずどこでもそうです。ぱっと見た目に、「ああ、これは 120 年前の村だ」と言えるような、そんな真空パックの村なんて、日本全国どこを探してもありません。ただ、そういったものの痕跡というものは、そこかしこに残されています。

私は個人的に名古屋の研究もしているのですが、名古屋はもちろんとても都市化されて、今では現代日本のトップクラスのまちです。それほど変わったまちですら、多くの歴史や自然地形の痕跡が、名古屋の街中に生きています。ましてや長久手に生きていないはずがない。そういう意味で、地図から少し過去の痕跡を読み解いていきたいと思います。

長久手も広いので、今日取り上げるところは長久手合戦の主戦場になったあたり、昔の長久手村の一部を取り上げたいと思います。

まず今の長久手の、長久手村の地図です。大体どのあたりかというのを想像していただくために地名を入れましたが、このあたりだと思ってください。はなみずき通り、アピタ、それから長久手古戦場に囲まれたこの一角です。ここはご存じのように、今はきれいな良好な住宅地になっているエリアです。

こういうはなみずき通りの駅の真向かいに、常照寺という古いお寺さんがありますが、ところどころ、こういったところに歴史の痕跡をたどることができますし、これは長久手古戦場の駅のあたりを古戦場公園のほうから写した写真ですが、こういった風景になっています。

ではここから古い過去を探していくには、どうやって探していけばいいのか。まずは今のこの地図のエリアの地形をつかんでいきたいと思います。というのが、地形はとても大事だということは今までお話ししてきたとおりで、当然ここにも湫と根が入り組む地形が隠されているはずです。

そう思いまして、今の地形図から標高を抜き出してみました。これはちょっと、いろいろ色が、グラデーションがついているのですが、この左上、はなみずき通りのあたりが若干青くなっています。そして徐々に暖色系というか、暖かい感じの色に変わっていって、このあたりでピンクが濃くなっていますが、このあたりが高いところです。

低くなればなるほど青に近づく色にしています。そして地名も入れてみました。地名は小林先生（小林 元先生でしょうか？）の、このご本が非常に参考になりました。

今見ていただいたように、赤いところというのは高いところです。丘の上です。つまりこのあたりが高いわけです。今でもグリーンロードを自転車でも車でも走っていると、やっぱりアップダウンがありますよね。アピタのあたりが高くて、一旦低くなって、古戦場にかけて高くなって、また古戦場の駅で下がるんですけれども、こういうもともとの地形が反映していることが分かります。このあたりが低い地形です。

こう見ていただきますと、高い地形というのは、ライン状に延びていることが分かると

思います。このあたりが高くて、ずっとこのラインで高いところが延びています。ということは、これが丘の尾根です。尾根というのは一番高くなった馬の背中みたいなところですね。ちょっと高くなったピークのところを尾根というのですが、この尾根のラインはこういう方向で延びています。この尾根の一番先端にある高台が富士浅間神社（ふじせんげんじんじゃ）です。富士浅間神社は、このようになっていますが、確かに高台の上にお社があって、そこに至る参道は、ずっと階段を上るようになっていますよね。この一番高いところは、今言った尾根の一番の突き当たりになると思います。

そして当然、この尾根があるということは、先ほど申し上げた「根」という地名がよく残っているということです。今の長久手古戦場のあたりは、もともと「仏（ほとけ）が根」という地名です。ここは根なんですね。尾根の上です。

そしてこの仏が根のこの丘からアピタ側を見ると、こういう写真になります。ちょっと分かりにくいですが、立っているポイントからそうとう下に道路があって、ずっと向こうにアピタの一番上の看板が見えるのですが、こういうふうに落ちていっています。これがこの尾根からこちら側を見た写真です。

そして、この尾根の突端が富士浅間神社ですが、このあたりも根地名が残っていまして、「富士ヶ根」といいます。ここも、この富士ヶ根に向かって、今バス道がついていますが、このバス道はゆるやかにアップしていきます。この写真の、ちょっとこんもりして生えている、ここのあたりが富士浅間神社ですが、こういうゆるやかなスロープを上っていく、こういう地形になっています。

今はずいぶん道路も区画整理もなされて、本来のアップダウンよりもゆるやかになっていますが、それでも完全に平たくしているわけではないので、この尾根の地形は歩けば分かります。車だと見過ごしてしまうかもしれません。

さて、今度は谷を見ていきたいと思います。今申し上げたように、尾根がここなんですが、これに川と、それからもともとあった溜め池を入れてみました。これは明治 17 年に作られた「字図（あざず）」とか「地籍図（ちせきず）」と呼ばれている詳細な地図なのですが、ここから復元したものです。

そうすると、当然低いところには川が流れています。先ほど申し上げたように、この尾根の左側は低く、この低いラインもずっとこういうラインで低いんですね。その奥のほうには池田池があります。つまり、この方向に向かって水が流れていて、ここの部分がライン状に低くなっている。こういう地形のことを先ほど申し上げたように谷といいます。尾根があって谷があってという、そういう地形になっていることがよく分かります。

この谷地形はここだけではなくて、ここは今は「せせらぎの径（みち）」と、川自体ではなくて、川の跡地のところに遊歩道がついています。これもこういうかたちですので、これがそのまま川だったと考えれば想像しやすい景観かなと思います。このようにちょっとゆるやかに蛇行していたりするのは、ちょっと川っぽいですね。このあたりもそうです。

この谷には当然、狭間地形がよく残っていて、ここは東狭間という地名が残っています。

谷はここ以外にもいくつもあります。ここにも谷があって、この２つの谷は合流して鴨田川になります。

そしてこちら側の尾根の右のほうには、別の川がありまして、これが香桶川(こおけがわ)です。今の鴨田川の写真です。そしてこれが今の香桶川の写真です。

このように、この尾根はいくつもの谷によって囲まれている、こういう地形になっています。そしてその奥には多くの溜め池があります。この溜め池は、規模は小さいのですがいくつもありました。有名なところでは血の池というものがあります。長久手の合戦にちなんだ地名だと言われているところです。ここも今は池としては無くて、埋め立てられて血の池公園というところになっていますが、目で見ると、確かにここは池だったんだという池っぽい地形が残っていて、この真ん中に人が立っているところのグラウンドが一段低い正方形の土地になっています。これが、おそらくそのまま池だったと考えられるので、一段低いこの土地は池です。こういうものも、今見てみるとよく分かります。

これらの池からは、小さな水がちょろちょろ流れていて、それがまた小さな谷を刻んでいました。こういう地形です。

ここでちょっと見ていただきたいのが、今のこの尾根のちょうど真ん中あたりは、周りに比べると若干低いんです。もしこの尾根を越そうと思えば、上がる労力を考えると、この低いところを越そうと考えます。ですので、たぶんここが峠、峠と言ってもすごい峠ではなくて、ちょっとした峠ですが、この尾根を越える一番合理的なポイントだと言えます。

さて、では本当に街道はここを通っているのかということで、今度は明治の道路を重ねてみました。この赤のラインが全て明治期の小さな道路も含めた道路ですが、特にこの斜めに走る太い道路、これが岩崎のほうに抜けていく旧道です。これはまさにこの峠のあたりを越えていく峠道になっています。これですね。この道路です。

これが岩崎への道で、この道路とは別に、名古屋から瀬戸に抜けていく道路が江戸時代の主要道だと申し上げました。これが青の道路です。こう見ると、このあたりが一部重複しながら交差していることが分かります。

では、このあたりで旧集落はどこにあるんだろうか。古い村はどこにあるかと考えると、これは当然ここになります。２つの道路が重なり、一番交通の便がいいところ、それでいてこちら側の谷に面した微高地で、丘の裾野です。こういったところに他の、先ほどの北熊集落と同じような集落の立地をしています。

この集落の前面には、大きな低地が広がっています。これが水田になります。このあたりは谷ですし、川も通っている、そして溜め池もあって、非常に水田開発には適したところです。ですので一面の水田が広がっていて、それを見下ろすところに集落があるという、そういうかたちになっています。

ここで面白いのは、真ん中に長久手城と呼ばれている遺跡があったということです。長久手城というのは城ですが、名古屋城や犬山城のような城ではなくて、それよりも昔の戦国時代のお城です。今行くと、長久手城は、ずっと坂を上りきったこの家のあたり、この

奥のあたりにあります。ですので、やはり水田を見下ろす高台の上にお城が乗っかっていることが分かります。今行くと、こういう観音堂、お堂があります。他にはほとんど遺跡はありませんが、この立地というのは非常に集落の中でとてもいいところになります。

ここは地名が残っていまして、城屋敷とやっぱりいうんですね。このあたりで見た住所表示だと、城屋敷という地名が残っていて、当然、城屋敷は、先ほど申し上げたように水田ができる低地に面していますので、その近くには狭間地名があることが多いです。実際に狭間地名があります。

このように戦国時代の城というのは、村の領主が居住しているのですが、そこは水利も良く、農地も把握できて、そして交通の便もいい、こういったところにお城ができているということがよく分かります。

もう1点、ここに氏神があります。これが景行天皇社です。村の氏神です。この氏神をここに持ってきてまつったのも、この城主だという伝承が残っています。

この氏神、景行天皇社の前に来ますと、今これがお社に向かう参道の鳥居ですが、その前に駐車場があります。昔から面白いなと思っていたのですが、この駐車場に入る鳥居は、この鳥居の方向と全然異なる方向を向いています。あらぬ方向を向いているんですね。こちら側を見ていただくとよく分かります。これが本殿に上がる鳥居ですが、これはそれとは違う方向の鳥居、こちら側の鳥居もそうです。

面白いのは、ここの前に今バス道が通っているのですが、この道路に直行するようには鳥居が面していないということです。これはなぜかというと、この地図を見るとよく分かるのですが、旧道はこういう斜めの方向に通っているからです。つまりこの鳥居とこの鳥居を結ぶラインに本来は旧道が通っていた。ですので、この旧道に即して鳥居が立っている。だけれどその後につくられたバス道は、それとは無関係な方向につくられたので、全く異なる、あらぬ方向を向いているわけです。

最近NHKで、「ブラタモリ」という番組がありますが、まさにそういう、ちょっとした歴史が感じられる痕跡です。

さらにこの旧道の奥には切通（きりとおし）という地名があります。切通は、その字のとおり、「切って通す」というところです。もともと山だったところをがさっと掘って、そこを少し低めて峠道をつくることを「切通し」というのですが、ここの風景もまさに切通しで、ここが富士浅間神社の丘ですが、こちらも高くなっているのですが、道路のところだけ、がさっと低いわけです。このような痕跡がよく残っています。

最後に、長久手の戦いと地理ということで、今の旧地形、旧の景観と、長久手の戦いを重ねて考えてみましょう。長久手の戦いは、天正12年（1584年）の、豊臣秀吉方対徳川家康・織田信雄（のぶかつ）連合軍の戦いです。それが小牧から長久手にかけての広域で起こったことはよく知られていますが、なぜ長久手の町域の中でもあの場所で起こったのか、そういったことを考えていきたいと思います。

ここで先ほどの明治の地図をちょっと見ていただきたいのですが、先ほど申し上げたよ

うに、これが旧道です。この中に赤で地名を記してあるポイントが、長久手の戦いにまつわる史跡が残っている地名の箇所です。そうすると、この地図の中でも、すごく集中していることが分かります。どう集中しているかというと、この丘に沿って長久手の合戦にまつわる地名がラインで残っているということです。

ここが長久手古戦場のあった、今の古戦場公園があるところですが、ここは仏が根の戦いという戦いが起こったところです。この戦いだけではなくて、いろいろな戦いがありまして、それはこの丘に沿ってずっと並んでいきます。つまり長久手の合戦というこの大きな戦いは、１つの丘のふもとに集中していて、それは赤で示した岩崎への道に沿っているということです。つまり、進軍ルートは、まずこの近辺で間違いなかろうということが分かります。

そして細かいことは町史や長久手の古戦場の郷土資料室で見ていただいたらいいので省きますが、前哨戦となる戦いは、秀吉側はこちら側から来て、家康側がこちら側から来るかたちで、ここで行われました。これがすぐそこの桧ヶ根で行われた桧ヶ根の戦いです。

この戦いと地理を重ねてみると何が分かるかというと、つまりこの場所というのは進軍ルートに沿う丘に布陣しているということです。つまり、戦国の合戦というのは、低いところにいる敵を上から射掛けるというのが非常に有利だということがあり、これが常套手段でした。まさにそれが可能な高低差のある地形を利用しているということが分かります。桧ヶ根のように「根」の地名が合戦場で残っている理由は、おそらくそうだろうと思われます。

そして３点目、これは時系列はぐちゃぐちゃになりますが、家康はこのあたりにもともと待機していました。これがこう、富士ヶ根、富士浅間神社のところまで本陣を移してきたと言われていますが、先ほど見たこの行軍ルートからすると、完全に裏手になります。見えたか見えていなかったかはよく分からないですが、少なくとも丘の背後の岩作の方向から出撃することで、こちら側の谷側から動向を気づかれにくい、そういったところを選んできているのではないかということが分かります。

そうすると、最終決戦であるこの仏が根の戦いが、なぜここなのかということも、おぼろげながらに見えてきます。このときは日進の岩崎城から引き返してきた秀吉方に対して家康側が迎え撃つという戦いですが、このポイントというのは、この地図を見る限り唯一の峠越えです。ここしかこの旧道は峠越えをしません。つまり、高台を狙って布陣しようとすると、このポイントというのが唯一にして最大のチャンスになるわけです。

それに加えて家康からすると、動向を悟られないように背後から動けるとても適した地形です。こういったところで仏が根の合戦という最後の決戦が行われたのではないかと思われます。

これをもう少し詳しく見るとこういうことになります。秀吉側の部隊が２方向に別れてやってくる。これに対して家康の本陣はここになります。池田勝入塚ですね。古戦場公園の中にある戦史碑の、このあたりに池田方がいて、そして武蔵塚ですね。そしてここにも

塚が残っていますが、ここに森隊が布陣していました。この丘陵のあたりをやっぱり狙って布陣しています。それに対して家康方は、この谷から出陣してきたと言われています。このあたりに最終的な本陣を敷いたと言われています。

こう見ると、互いにやっぱり高いところを取り合っている合戦の様相を呈しています。こういう丘陵地形の尾根と谷をたくみに合戦に利用しているということがよく分かります。

この合戦の記録、ほとんどはそれ以降に書かれた軍記ものなので信憑性はよく分からないのですが、どの合戦の記録にも、あまりこのあたりの、先ほど復元した古い集落のことが出てきません。おかしいなと思っていたのですが、こうやって合戦を重ねてみると、古い旧集落はここなんですね。長久手城はここです。ということは、微妙に合戦場とずれている。これは考えてみれば当たり前のことで、集落はできるだけ谷に面しようとする。日常生活が大事なので。だけれど合戦はそういうこととは無関係に高いところに布陣しようとする。尾根を取り合うわけです。なので合戦場と集落とは、ちょっとずつずれてくるというのもよく分かります。

さて、ここまでちょっと長々とお話ししてきましたが、最後にまとめておきたいと思います。このように長久手の古い地理と歴史を紐解きながら現代の景観を読み解く。景観というのは、何度も申し上げているように、この地域の独特の地理と、この地域ならではの歴史を反映したローカルな個性です。景観というのは、本当に唯一無二のものです。そういった個性をどれだけ私たちが認識するかということが大きいかなと思っています。

そして、一見すると長久手の住宅地になったところには、何も過去の痕跡は生きていないように見える。けれども丹念にこういう地図を見たり、重ねて考えていくと、先ほどの景行天皇社の鳥居の向きに見るように、過去の人々が生きた痕跡というのは点々と残されています。歴史というものは、そう簡単に消えない。歴史というものは風景の中に生きているということです。

最後に申し上げたように、長久手の合戦も、ただあそこだけが史跡だと考えると、そこで思考は止まってしまうのですが、なぜあの場所が史跡なのか。それを長久手の地理全体の中で、地理全体を舞台として考えると、どうしてあそこなのかという価値が初めて分かる。再発見できる。

ですので、やはり「歴史」と「地理」というものは重ねて考えていくと非常によく分かる。それがこの地域のオリジナルな個性に結び付いてくるということです。

最後に、私はどちらかというと「まちづくり」というよりは、こういう歴史研究や地理研究を主にやっているのですが、地理とか歴史とか景観というのは、おそらくこれから先、長久手に限らずですが、いろいろな市町村で活用されてくると思います。「いや、うちはそんなに大した歴史はないから」というような市町村もあるのですが、先ほど見たように、歴史というものは別に大きな出来事、イベントだけが歴史ではなくて、脈々とその土地に根付いてきたものが歴史です。そう考えると、青い鳥は、けっこう足元にいたりするんです。すでに持っているローカルな価値というものを再認識していって再発見すること。そ

れも一つの方法かなと思っています。

このようなことを続けていくと、当然、長久手というものの個性が分かってきて、ここの魅力が分かり愛着が湧いてくる。それが一つの住民の方の、そしてここを訪れる方にとっても文化力になるのかなと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

（拍手）